

ほけきよう ぎようじや

法華經の行者に二人あり

しようにん

聖人は皮をはいで文字をうつ

もんじ

ほんぷ

す 凡夫は ただ ひとつきて候かたびら などを法華經の

ほけきよう

ぎようじや

くよう

行者に供養すれば皮をはぐうちに仏をさめさせ給うなり、

収

たま

ほけきよう

此の人のかたびらは法華經の六万九千三百八十四の文字の仏

もんじ

たま

にまいらせさせ給いぬれば 六万九千三百人十四のかたびら

なり、又六万九千三百八十四の仏 一一 六万九千三百八十

もんじ

四の文字なれば 此のかたびらも又かくのごとし、たとへば

春

はるの野の千里ばかりに くさのみちて候はんに すこしの

草

そうら

豆ばかりの火を くさ ひとつにはなちたれば一時に無量

いちじ

むりよう

無辺の火となる、此のかたびらも又かくのごとし、ひとつの

領

もんじ

かたびら なれども法華經の一切の文字の仏にたてまつるべ

ほけきよう

いっさい

もんじ

し。

この功德くどくは父母ふも 祖父母そふも 乃至無辺ないしむへんの衆生しゅじょうにも をよぼし
てん、まして わが いと最をしと 愛愛をもふ をとこは申もうすに
及およばずと、おぼしめすべし、おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮にちれん

花押かおう

さじき女房にようぼう御返事ごへんじ

(解説) さじき女房とは

六老僧日昭の兄、印東次郎左衛門尉祐信の妻で、印東祐信の父を祐照、
その妻の妙一尼をさじきの尼、嫁をさじき女房と称したと言われている。
昔、印東氏が源頼朝の由比ヶ浜遠望のために山上に栈敷を構えた

後に、居を構え住したことになるもので、地名に由来したもの

● 女人の境界は連れ添う夫によって定まることを教示

女性(は)求(ぐ)道(どう)心(こころ)を害(がい)する、見た目は菩薩(ぼさつ)だけれども内心は夜(よ)や叉(また)しやであるなどと言(い)われ、その性質(しやうしやう)も三毒(さんどく)強盛(きやうせい)にして、川(が)のごとく曲(まが)がった心(こころ)、曲(まが)がれ木(き)の如(ごと)しなどとされ、永(とこ)く成仏(じやうぶつ)できない者(もの)として嫌(きら)われ、やっと法華経(ほっけ)で成仏(じやうぶつ)を説(と)かれた

当(たう)二世(に)に亘(わたり)つて夫婦(ふうふ)一体(いつたい)であるとの教(しよ)えから、善人(ぜんにん)の夫(お)に従(したが)う女人(おんな)が現当(げんたう)に亘(わたり)る成仏(じやうぶつ)を遂(た)げることが説示(せつし)され、夫(お)の祐信殿(すけのぶのどの)が善人(ぜんにん)たる法華(ほっけ)経(きやう)の行者(ぎやうぎや)であることから、女房(にようばう)も法華経(ほっけ)の女人(おんな)であり、即身成仏(じやくしんじやうぶつ)が疑(うたが)いないと決定(けつてい)されている

「女人(おんな)となる事(こと)は物(もの)に随(したが)つて物(もの)を随(したが)へる身(み)なり」(同 九八七頁)

★女人は夫に従っているように見えるが、実には従えている。自ら発心し率先して取り組む信行の在り方こそ大事であり、生活の中心をはっきりと自覚し実践できる婦人に。婦人が動けは皆が動く。その道理を実践した方こそさじき女房。手本としていこう。 ● 「上宮は手の皮をはぐ」（『開目抄』五七八頁）聖徳太子が手の皮をはぎ、血を採って梵網經の外題を書いたことや、樂法梵士が身の皮を紙とし、骨を筆とし、血を墨として一偈を書き留めようとしたというもの。

聖人の行者Ⅱ雪山童子は半偈のために身をなげ常啼菩薩は身を売り善財童子は火に入り樂法梵士は皮をはぐ藥王菩薩は臂をやく不輕菩薩は杖木かうむり師子尊者は頭をはねられ提婆菩薩は外道にころさる

★樂法梵士や雪山童子は釈尊が過去世で修行していた時の姿

●帷は一枚ではない。

★この功德は自分一人に止まるものではなく、どこにでも行き渡る風のように無辺に開き、世界を浄化していく